



Title	血中人成長ホルモン：手術並びに寒冷及び熱気曝露時における人成長ホルモンの血中動態に関する研究
Author(s)	松岡， 徹
Citation	大阪大学，1974，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31317
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[30]

氏 名・(本籍)	まつ 松	おか 岡	とある 徹
学 位 の 種 類	医	学	博 士
学 位 記 番 号	第	3 1 8 3	号
学位授与の日付	昭 和 49 年 7 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
学 位 論 文 題 目	血中人成長ホルモン —手術並びに寒冷及び熱気曝露時における人成長ホルモンの血中動態に関する研究—		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授	熊原 雄一	
	(副査) 教 授	西川 光夫 教 授 山村 雄一	

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

人成長ホルモン (Human Growth Hormone: 以下 HGH と略す) の radioimmunoassay を用いて, 手術時ならびに外気温の変化時における HGH の血中動態を明らかにせんとした。

〔方 法〕

HGH は二抗体法を用いた radioimmunoassay により測定した。手術時の HGH 測定は, 急性虫垂炎, 胃潰瘍, 胃癌, 脳腫瘍患者を対象とした。寒冷曝露実験では健常成人 4 例を, over-night の絶食安静後薄着で 4℃の氷室に 1～2 時間静坐させた後, 23℃の室温下でさらに 1 時間安静を保たせた。一部の症例では寒冷曝露中にインスリン負荷試験 (0.05 u/kg 体重) をおこなった。熱気曝露実験では健常成人 4 例・軽度肥満者 1 例を, 空腹安静時に 46～48℃のサウナ風呂に 1 時間, その後室温下で 1 時間静坐させた。一部の症例では, 30 分前および直前に 50 g ブドウ糖を経口投与した後, 熱気曝露をおこなった。発熱物質投与実験では健常人に sterile bacterial endotoxin を体重 1 kg あたり 0.1 ml 静注した。

〔成 績〕

① 測定法に関する検討

第一抗体は Raben 法で抽出した HGH を家兎に感作して得た抗血清を 10,000 倍稀釈したものを, 第二抗体は 10 倍稀釈抗家兎 γ -globulin 山羊血清を用いた。 ^{125}I -HGH は Hunter and Greenwood 法で標識し, Sephadex G-50 で精製後 Sephadex G-100 によるゲル濾過で再精製した。その結果 3 つの分画を得, 第 2 分画に最も高い免疫活性を認め, これを測定に供した。反応系に ACTH, FSH, TSH を添加しても影響はなく, 回収率 90～125%, 同一測定系および異なった測定系で同一検体を測定した際の変

動係数は、それぞれ2.1, 18.0%であった。同一 batchの抗血清, ^{125}I -HGH, 標準 HGH を用いて本法とクロマト電気泳動法を比較したところ、両者の標準曲線および測定値には良好な一致 ($\gamma = 1.031$) がみられた。

② 手術

胃潰瘍あるいは胃癌患者23例中の胃切除術時の血中 HGH は、手術開始60分後に術前値から $24.6 \pm 20.6 \text{ ng/ml}$ 増加した。ブドウ糖を点滴静注し術中の血糖値を $110 \sim 298 \text{ mg/dl}$ とした4例の胃切除時の血中 HGH は、開始60~90分後に $11.0 \sim 65.5 \text{ ng/ml}$ の増加を示した。

開頭手術時の血中 HGH は、通常の麻酔による2例の脳腫瘍摘出術では $1.5, 1.0 \text{ ng/ml}$ から、最高 $19.0, 24.0 \text{ ng/ml}$ に上昇した。低体温麻酔により術中の直腸内温度を 32°C 以下とした2例では、血中 HGH は術中有意の増加はなかったが、手術終了8~12時間後に術前値 $1.0, 2.5 \text{ ng/ml}$ から $30.0, 12.0 \text{ ng/ml}$ に上昇した。

③ 寒冷曝露

健常人4例を氷室中に2時間いれると、血中 HGH は寒冷曝露中は全例有意の増加はなかったが、室温にもどした30~60分後に 1.1 ng/ml 以下から $4.2 \sim 13.5 \text{ ng/ml}$ に上昇した。2例を対象に寒冷曝露を1時間とした時の血中 HGH は、寒冷中に変化しなかったが、室温にもどした30分後に 0.5 ng/ml 以下、 2.5 ng/ml から $5.2, 5.6 \text{ ng/ml}$ に上昇した。2例で寒冷曝露中にインスリン負荷試験を施行すると、血中 HGH は最高 $32.0, 7.0 \text{ ng/ml}$ に上昇した。この2例に室温下で同じ量のインスリン負荷をおこなった時の血中 HGH は、1例では最高 26.5 ng/ml に上昇したが、他の1例では増加は認められなかった。

④ 発熱物質

pyrogen を健常人に投与すると、体温は 37.0°C から3時間後に 37.8°C に上昇、血中 HGH は 2.1 ng/ml から1時間半後に 7.0 ng/ml に上昇した。

⑤ 熱気曝露

健常人4例と軽度肥満者1例を $46 \sim 48^\circ\text{C}$ の熱気に1時間曝露すると血中 HGH は健常人では $0.8 \sim 1.6 \text{ ng/ml}$ から1時間後に $6.2 \sim 30.0 \text{ ng/ml}$ に上昇したが、軽度肥満者では 2.0 ng/ml から 3.5 ng/ml に上昇したにすぎなかった。健常人2例に熱気曝露30分前および直前に 50 g ブドウ糖を経口投与して同様の実験をおこなったところ、血中 HGH は $1.0, 1.7 \text{ ng/ml}$ からそれぞれ1時間後に 0.5 ng/ml 以下、 0.5 ng/ml に低下した。

〔総括〕

- ① 開腹・開頭手術時には血中 HGH の明らかな上昇が認められ、この上昇は術中にブドウ糖を投与しても抑制されなかった。
- ② 低体温麻酔下における手術時の血中 HGH は低体温中是不変で、手術終了後体温が回復する時期に上昇した。
- ③ 健常人を 4°C の氷室に1~2時間いれると、血中 HGH は氷室滞在中は不変で、室温にもどして体温が回復する時期に上昇した。氷室滞在中にインスリン負荷試験を施行すると、血中 HGH が上

昇することを認めた。

- ④ 健常人に発熱物質を投与すると、体温上昇とともに血中 HGH は増加した。
- ⑤ 健常人を 46～48℃ の熱気中に 1 時間いれると、体温の上昇とともに血中 HGH は明らかに増加したが、軽度肥満者ではこの増加はわずかであった。熱気曝露時の HGH の上昇は、あらかじめブドウ糖を投与すると抑制された。

以上より、HGH 分泌は手術ストレスのほか外気温の変化によっても影響されることを確認した。

論文の審査結果の要旨

成長ホルモンは単に成長を促進するだけでなく、糖・蛋白・脂質等の代謝やストレスなど種々の状況下において分泌されることが明らかとなっている。ところで手術あるいは外気温の変化も生体にとってストレスになると考えられるが、このような状況下における成長ホルモン分泌に関する知見は乏しいのが実情であった。本論文は、通常麻酔時および低体温麻酔時における手術中の成長ホルモン、ならびに健常人を寒冷あるいは熱気に曝露した際の成長ホルモン分泌動態について明らかにしたものである。